

第10回会議で出された主な意見

【青少年健全育成や心の育ちを推進する方策について】

（奉仕活動・規範意識に関する視点）

家庭では人間関係能力に限界がある。人間関係能力は、小さいときにいろいろな友達と接しながら育っていくものであり、学校で重点的にきちんと指導するのが、道德そのものであると思う。

規範意識というものは、道德教育そのものであるから、きちんと評価をし、未熟なところは、学校の先生たちが評価して指導すべき。

道德について学校では、評価というより、まずは規範意識を確実に育成することと思う。中学校では、家庭と学校、保護者と教師が情報連携しながら、子どもの育ち、豊かな心を育てていっている。

道德という教育は、知育、体育、徳育であり、心の問題というのは「徳育」そのものである。家庭において本人にも気づかせ、一緒に指導していくべきであり、ここは心の教育の根本だと思う。

道德については、親が中心にならないといけない。8割は親で、残り2割が学校かもしれないが、親がしっかりしないと子どもは育たない。親の教育というものが、どこかにあってもいいような気がする。

家庭の教育力を高めるために学校はできる限り努力している。行政は、家庭の教育力をどのように高めるか真剣に検討しなければならない。

私たちは子どものことをきちんと考え待ってあげるというゆとりがなく、市民センターでいろいろな事業をする際、どうしても自分たちが主導して行っている。子どもがもう少し主体的にかかわれるようなことをしていけば、子どももその場で成長する機会にもなると思うし、親も子どもの成長と一緒に喜べるのではないかと思う。

企業では、能力の評価と態度の評価を行っている。子どもたちが社会に出て行くためにも、学校において道德の評価を行い、必要な指導をしていくべきである。

（不登校、いじめ、校内暴力等問題行動に関する視点）

いじめについては、北九州でもすべての学校で必死に取り組んでいるが、道德教育は、学校だけではできないと思う。市内の中学校では、いじめを道德教育の延長線上に位置付け、生徒・保護者・教師が協働して、いじめは絶対に許さないという言葉を出し、星ヶ丘カレンダーというものを作成している。

良くない行動やいじめ的な言動があった場合、当然、学校はきちんと指導するが、併せて保護者にも伝えている。保護者の中にも、学校で良くないことをした場合、きちんと知らせてほしい、家庭でもしっかり指導したいというような話がある。

不登校の問題は、いじめとリンクしているはずであり、今後も議論していくべき。

(健全育成に関する視点)

付添人活動を通じて、ひとえに非行の原因は家庭にあるのではないかと思うが、家庭が疲れているというのが、表現として当たっているのではないかと思う。家庭が疲れているのかということころは、やはり経済的なところが一番目に付く。

家庭がとても疲弊しているという状況については、そのご家庭だけでなく地域全体の観護能力が落ちてきているのではないかという印象がある。

中学校では、とても熱心に指導される先生もいるが、先生は相当負担が掛かっているのではないかという印象がある。それを学校側がうまく、組織としてフォローする制度があればいいと強く感じる。

虐待をしてしまっている家庭の問題と非行少年がいる家庭の問題というのは、連動性があると思う。非行少年は、昔、虐待され、また、その親御さんも、もしかしたら昔はそうだったのかという流れが何となく見えてくるので、その家庭ごと何とか地域や社会で救ってあげる必要があるのではないかと思う。

家庭の観護能力が落ちており、地域もなかなかサポートできないところがある。社会全体というもう少し広い枠で観護能力を充実し、子どもたちのいろいろ置かれた現状を良い方向に回復させていけたらということ強く感じる。

人的・物的に、よりよい教育環境の中でこそ、健全な心は育つ。この認識がまず基本である。家庭であれ学校であれ地域であれ、子どもを取り巻く環境が悪ければ、子どもの心は育たない。

世代を超えた人とのかかわりや地域のつながりを強め、人を育てていくというようなことが、今、市民センターに求められていると思う。

子どもの心を育てることを考えた場合、やはり学ぶことと体験することの2つが一緒になって、初めて本当の子どもものになるのではないかと思う。

子どもたちが人とのかかわりやコミュニケーション能力を培っていくためには、学校現場や市民センター、NPOなどが総合的に取り組んでいくことが必要ではないか。

(その他の視点)

教育日本一に関しては、子どもたちから見て日本一、地域の大人のみんなが日本一ということではないか。自分たちのことを気にしてくれていると、子どもたちが印象を持てるような行動が必要ではないかと思う。そのためには、大人が子どもたちを肯定的に見てあげられるような体制をつくってあげることが大切ではないかと思う。

日本の伝統的な教育概念、教育手法は2点あり、その1点は生徒指導である。キーワードは自己実現。子ども一人ひとりの健やかな成長を阻む要因を除去する営みである。

もう1点は、“学校文化”と呼ばれる教育概念で、その中心課題は自治能力の育成である。小学校は小学校、中学校は中学校の、自治能力の育成のあり方がある。自分たちの学校生活を守る力、育てる力、学校生活を豊かにし、創造する力を育てることである。

【放課後の居場所づくりについて】

（子どもたちの活動を支える人材、場所の確保に関する視点）

部活動や地域でのスポーツなど、文化的で子どもたちがやりたいと思えるようなことに参加できる機会を増やすということは、子どもたちのプラスになる。そのような活動をバックアップしていくことが必要。

市民センターは、生涯学習やコミュニティなど幅広い地域活動の拠点施設として位置づけられており、一緒に活動する地域みんなの力が試されていくこととなる。良いアイデアなど活動にかかわるコーディネーター的な人材の配置も必要ではないか。

子どもの育ちには、時間・空間・仲間という三つの間が必要と言われているが、そのどれもがなくなっているというのを強く感じている。大人は、子どもたちの居場所を考えるのと同時に、できれば大人が管理したものではなく、子どもたち自らが主体的に活動できる場というのを保証したいと考えている。

今の子どもたちは、自然の中で遊ばず、クーラーが入ったところでゲーム機をして遊んでおり、このような状態では健やかに育つはずはない。

遊び場開放としては、学校は大きな場ではないかなと思う。土曜日や夏休みの間開放しているが、子どもはほとんど来ていない。体育などで使う遊び道具、体育道具はたくさんあり、竹馬や一輪車等も整理している。これらをフルに活用し、体育館、運動場等々をもっと活用できる制度ができるといいと思う。また、学校職員が管理に当たることは難しいので、人を配備してほしい。

大学生は、これから先生になりたいという方もいると思う。体験の場としても、子どもたちにかかわっていくというのはすごく重要なことなので、ジュニアリーダー的な養成ができれば、面白いと思う。

子どもに冒険心を植え付けるためには、丸太にロープをくくりつけたり、丸太と丸太を渡して渡ったりという冒険も必要ではないかと思う。

家庭の温かさというのが幼い時から全く忘れられてしまっている中、子どもたちには、素敵な放課後という子どもの居場所、心を開いて本当に過ごせる場所が必要だと思う。小学校から中学校、高校までみんな一斉にということの中、全児童を対象として小学校でつくられる学童保育クラブで、子どもたちは果たして自分の居場所を見つけることができるのか不安である。子ども一人ひとりの心を汲み取れるような指導員が必要。中高生はどうしても地域から離脱する傾向があるので、子どもの権利条例を入れている志免町は居場所ということ 키워ドにして、「リリーフ」（施設名称）という中高生が（テレビゲームは持っていいとはいけないんですけども、）安心して、行けば誰かに会えるような場を用意している。

子育て支援ということで考えるならば、夕方から夜の8時ぐらいまでみてくれる、子ども一人ひとりの心を汲み取れるような指導員の配置が必要。行政が質の高い形で予算を配置しながらみていくということを考え、役割を果たしていくことが必要ではないかと思う。

(既存施策をより効果的にするための方策に関する視点)

デンマークでは、夏休みの期間中に合わせて一覧表が配られ、ゴーカートや海の生き物など趣味につながるようなメニューがたくさんあり、すべてワンコインで参加できる。北九州でも、いろいろな活動を安く体験できるという仕組みなどを工夫してみてもよいのではないかと。

市民センターでは、地域の人と一緒に、地域の子どもの健全育成に取り組む、地域子ども交流事業を、大人も子どもも一緒に楽しめるようなプログラムで年間を通じて実施しようとしているが、中学生、高校生を対象にしているわけではなく、そこが課題となる。小学校での遊び場開放については、まだあまり知られていないように思う。小学生だけでなく、中学校やその他の方が入ってもいいということを、広報すべきだと思う。また、自由に使うのも大事だが、やはり、管理を行う人は必要であると思う。

【北九州市の教育のあるべき姿・目指すべき姿について】

（目指す子ども像に関する視点）

10年後のあるべき姿という部分は、非常に難しい。10年後のあるべき姿というよりも、子どもたちの10年後、こんな大人になってほしいということではないかと思う。今、10歳の子が20歳になった時は、私たちが理想とするこういう大人になっているために、今ここで、何をするのかということ、まとめてほしい。

もっともなことが書いてあるが、このままでは目指す子ども像を、東京っ子、北海道っ子、札幌っ子としても、間違いではなくなってしまうと思う。

必要なことは押さえた上で、特に北九州として何をすべきかというところを、きっちり打ち出さなければいけないのではないかと。

どういう社会人になるのかという、そのイメージ像が大切ではないかなと思う。10年後の教育も大切だが、どういう社会人に、大人になってほしいのかということがあって、そこから向けて、どういう子どもでなければならぬのかと、どういう教育をしていかなければならぬのかということをはっきり描くべきではないか。

子どもたちが10年後大人になったときに、自分たちの北九州を考えたり、北九州っ子ってどうあるべきだと考えたときの発想が広がるためには、いったん規制を外してしまっ、もう少し子どもたちに自由な発想をさせることが必要。

（6つの視点に関する意見）

「学校の力をさらに高める」の欄では、誤解のないようにするため、少人数学級や先生の増員、1人当たりの子どもの数の問題などを、きっちり定義したほうがいいのではないかと思う。

北九州市は10代の妊娠率が全国平均の1.6%に比べて2.4%と非常に高くなっている。これは虐待の問題や性感染症にもつながる危険な問題である。

そこで、特に感染症やはしかも非常に問題になっていることから、ぜひ保健教育の充実という項目を入れるべきである。

性教育の問題は、子どもたちは無防備で感染が広がっているというのが現状である。また、薬物も問題である。注射器を使っているということで、感染が広がってきていることもあり、これらも踏まえて考えていくべきではないか。